明石の史跡（６３）旧長坂寺の鐘

文安４年（１４４７）１１月１０日、魚住荘に所在する長坂寺において、梵鐘完成の落慶供養がおこなわれた。梵鐘が失われてから年久しく、衛門（法名は道宝）なるものが、民間に浄財を募ったところ、きわめて短期間のうちに、成功を収めた。協力を惜しまなかった人々のなかに、注目すべき人物の名が、浮上してくるのである。その人物とはいがいにも、当時の播磨守護－山名持豊である（旧長坂寺蔵『兵庫県史史料編中世４』６０３頁）。

室町幕府の当初以来、播磨守護は赤松氏が独占してきた。このポストを赤松氏が失う契機となったのは、世に有名な、赤松満祐による、将軍足利義教の誘殺事件（嘉吉の変）である。

赤松満祐追討軍の主力として、但馬から播磨に進撃した山名勢は、嘉吉元年（１４４１）９月１０日、本城（城山＝きのやま）に追い詰め、とどめを刺す。同２１日、四条河原に満祐の首が、曝されることによって、事件は落着する。ところが山名持豊は、播州に在陣して、年貢や所領の横領をおこなったという（『建内記』）。そして１０月１１日、山名持豊は、新守護として播磨に入国した。

こうした動向に叛旗をひるがえしたのが、一族の赤松満政であった。文安元年（１４４４）１２月２０日から、翌年３月にいたる播磨での内戦は、「当国動乱」といわれるほど、はげしいものであった。この内乱を鎮定することによって、山名持豊は、名実ともに播磨守護となったのである。

長坂寺は、現在は廃寺である。寺址は魚住町長坂寺。しかも古代以来の大動脈である山陽道に面している。南へ３キロ弱下れば、そこは海上交通の一拠点でもある魚住泊（江井ヶ島港）。人と物の流通する要衝に着目したのも、なんら不思議ではない。

日本歴史学会会員　茨木　一成

遍照寺